

Ⅱ. 植生概観 Übersicht der Vegetation

富士市は、海拔0.7mの海際より、海拔3,421mの富士山山頂近くまで擁して、垂直的にも広い面積を占めている。植生はヤブツバキクラス域から高山のコマクサーイワツメクサクラス域まで、中部日本の、太平洋岸側の植生の縮図ともいえる。

富士市の低地帯は、海際に堤防が築かれ、わずかに田子ノ浦にコウボウムギ群落やハマエンドウ群落などが島状に生育しているだけで、砂丘植生の発達が悪い。富士川の流れが急なため、河口付近の海岸は礫海岸になっていることも一因であろう。堤防の裏には、2～5 kmの帯状に続いた、古砂丘上のクロマツ植林が樹高3～12mでみられる。林内は下草刈りや落葉かきなどの管理がよく行なわれ、チガヤ、スズメノヤリ他の草原が広がっている (p. 54)。宮島新浜の毘比羅神社には、ヤブニッケイ、ヤブツバキが優占した、樹高10mのマサキートベラ群集にまとめられる林分が残されている。この林分は、古砂丘上の潜在自然植生を代表するものと考えられる。鮫島、鈴川、田中新田、檜新田、西・中・東柏原新田などの古砂丘後背地にはクロマツ、ヤブニッケイ、シロダモ、スダジイなどが植栽された緑の多い住宅地が広がっている。

富士市の低地では昔、沼であった浮島沼に、現在は、チゴザサーヨシ群落が広がって、一般に



Fig. 4 岩本山からみたイノデータブノキ群集域は畑地や宅地に利用されている (富士市岩本, 海拔20m)。

Ausblick vom Iwamotyama auf die Landschaft des *Polysticho-Perseetum thunbergii*-Gebietes, die heute als Siedlungsfläche weit genutzt wird (Iwamoto 20 m ü. NN. Stadt Fuji).



Fig. 5 茶畑, スギ植林, モウソウチク林, シキミ苗圃など多様な土地利用の
みられるヤブコウジースダジイ群集域 (富士市今宮, 海拔220m).
Ardisio-Castanopsietum sieboldii-Gebiet mit Tee-Garten,
Cryptomeria japonica-Forst, *Phyllostachys heterocycla* f. *pubescens*-Bestand,
Illicium religiosum-Garten (Imamiya, 220m ü. NN, Stadt Fuji).

浮島ヶ原と呼ばれている。かつて水田に利用されていたところでは畔に植栽されたタチヤナギ、ジャヤナギが生長し高木になっている。ヨシの中にいつ出したコリヤナギや自然にタチヤナギが生育しているところもある。現在水田として耕作されているところでは、湿田はスズメノテッポウタガラシ群集、乾田はノミノフスマーケキツネノボタン群集が広く発達している。潤井川流域に旭化成工場、大昭和製紙富士工場、東芝富士工場、日産自動車富士工場他、多くの工場群が低地を埋め立てた地区に立地している。このような工場街は境界環境保全林の帯で囲いたい。昔からの集落は、生垣、庭木などの緑が多く、比較的緑の多い住宅地になっているが、吉原本町や、富士中町など新しく市街地化した地域は、まだまだ緑が少ない。公共施設、並木などの緑を、市役所あるいは駅などにみどりのシンボルゾーンを形成し、放射状、あるいは網目状に緑をつなげてゆく必要がある。日本一の富士山をその裾野に残されている緑につなげてゆきたい。

富士川の流域は、急流なため豪雨時に河辺草本植物が流されやすく、河辺植生の生育が悪い。わずかにナガバギンギンギンギン群集の植分が有機物堆積地にみられるにすぎない。流域の沖積地は、ミカン果樹園が広がっているが、水神社にイズセンリョウ、ツルコウジをもつホソバカナワラビースダジイ群集の林分が残されており、桑崎の浅間神社とともに、潜在自然植生を具現している。ミカン果樹園は、岩本山東面と、愛鷹山山麓に広がっている。

富士山、岩本山、富士山山麓は、海拔 350m 付近まで桑畑に広く利用されている。岩本山の台地上もよく茶畑に利用されており、富士市の一景観を形成している。茶畑は、面積は狭くなりながらも海拔550～600mまでつくられている。

岩本山の南東面、南西面にはスダジイの萌芽林が帯状にみられる。その他山頂部は管理が十分行なわれているが、生育がよくないスギ、ヒノキ植林がみられる。西面の富士川に面した斜面や、北面の富士川町側斜面にはコナラ林が生育している。北面の一部は砂利採取が行なわれ、大規模な掘りとりにより、崖斜面ができ、一部にヤシヤブシ類を植栽している。掘りとり後の環境復元が問題になる地域である。

富士山の海拔 100m 付近より 1,250m 付近までは広い面積のスギ、ヒノキ植林が広がっている。ヤブツバキクラス域の植林内には、ヒサカキ、アラカン、ヤブツバキ、アオキ、キツタ、ベニシダなど、ヤブツバキクラス林構成種がわずかながらみられる。海拔450～650mを境界として、高海拔地では、林床の常緑広葉樹がほとんどなくなり、アブラチャン、クロモジ、マメザクラなど夏緑広葉樹がみられるようになる。冬季は雪につつまれ植物は何もみられないこともある。



Fig. 6 フジサンニシキウツギーマメザクラ群集、ウラジロモミ植林、シコクスマイレープナ群落が分布する富士山麓域（表富士周遊道路、海拔1,150m）。
Weigelo-Prunetum incisa, *Abies homolepis*-Forst und *Viola shikokiana*-*Fagus crenata*-Gesellschaft kommen am Fuß des Bergs Fuji vor (Südfuji-Rundstraße, 1,150 m ü. NN).

林道曾比奈線沿いの海拔 950m 付近にはイワボタン—シオジ群集の林分や、シロクスミレーブナ群落の林分が一部残されている。海拔 1,200m 以上にウラジロモミ植林が多くみられる。カラマツ植林もわずかにみられる。海拔 1,900m 以上にはシラビソ—オオシラビソ群集の高木林が発達している。2,500m 付近ではカラマツ先駆群落がほ伏して生育している。さらに高山のオンタデが叢状に生育するイワスゲ—イワツメクサ群集は、海拔 3,500m までフジハタザオ、ミヤマオトコヨモギなどを伴い生育している。それ以上の高海拔地は裸地化している。

一部、富士山の溶岩台地（海拔 600m 付近）の丸火自然公園ではクリーコナラ群集やクリーミズナラ群集が上部につづいている。

愛鷹山は、富士山と異なり、山頂付近は玄武岩や安山岩類からできた岩肌がそそりたつ鋸岳を伴い、山頂付近はアシタカツジ—トウゴクミツバツジ群落の低木林、岩上にオノエラン—ハコネコメツジ群集、フジアカシヨウマーシモツケソウ群集、ウラハグサ群落、ヒトツバシヨウマーコイワザクラ群落などの岩隙植生がへばりついている。越前岳（1,507m）や呼子岳（1,200m）にはヤマボウシ—ブナ群集、オオモミジガサ—ブナ群集でまとめられるブナ林が発達している。急斜面や、谷部にはサワダツ—クマンデ群落が発達し、伐採された二次林ではクリーコナラ群集がみられる。須津川溪谷沿いは、岩礫が多く、海拔 800m 付近ではカモシカの死がいや岩礫下で発見された程不安定な立地で、谷部ではタマアジサイ—フサザクラ群集がサワダツ—クマンデ群落に接して発達している。谷ぞいのやや尾根部にはアカガシが混生している。須津川急斜面では、海拔 350m 付近までアラカン萌芽林やスダジイ萌芽林がみられる。その他は、スギ、ヒノキ植林に利用されている。